

LL教室を使った中国語教育について

安井 二美子

1. はじめに

私が授業で初めてLLを使ったのは、10年程前、ある中国語の専門学校で通訳班を担当していた時のことである。このコースは週2回の開講で、日本人と中国人の教員がペアとなって担当した。中国人教員は日文中訳、日本人教員は中文日訳を受け持った。日本人教員である私は中文日訳を担当し、この時初めてLLに触れることになった。この通訳班は夜の開講であったことから、学生のほとんどが社会人であり、また既習者であることから、中国語を学習する動機付けが明確で、習得に対する熱意も高かった。従って学生から学習に対する積極性を引き出す苦労もなく、LLの使い方についての工夫もあまり試みなかったように思う。当時、LLを使ってはいたものの、聞き取りとリピートを行うぐらいで、テープレコーダと大差はなかった。

次にLLを使うことになったのは立教大学である。昨年、舛谷先生の主催によるLLの説明会が開かれた。2000年4月のことである。この時舛谷先生から利用方法のご紹介があり、これを

機にもう一度LLの使用を思い立った。以前使った経験があるとはいえ、先に述べたようにテープレコーダの代用をしていただけであり、また今回は新しい機種ということもあって、ゼロからの出発であった。

2. 教材

立教大学の中国語の授業では、統一教科書が使われている。LL用に編まれた教材ではないため、当初、LL教室では統一教科書とは別にLL専用の教材を副教材として使うことを考えた。しかし、年間の授業数から計算すると、統一教科書を消化するだけで精一杯であり、副教材を使用するだけの時間的余裕を持つことは難しいと判断し、統一教科書をLL用に利用できるよう工夫することにした。

3. 運用と反省

私が立教大学で担当している授業は1年次であり、前期は発音の習得が重要な課題である。発音の習得過程において最も利用価値が高かったのは試験時間が短いということである。普通教室で試験を行った場合、一人一人の発

音の聴取に時間がかかることに加えて、同じ試験問題を出した場合、最初に聴取した学生と最後に聴取した学生との間に時間差による不公平感が生じる。各学生に異なる試験問題を出すことを試みたことがあるが、これでは問題による不公平感が生じてしまう。LLはこの2つの問題を一举に解決してくれた。全学生の発音を一斉にブースで吹き込ませることができることから、時間は普通教室に比べて大幅に短縮できる。また、同一の試験問題を出しても、一斉に吹き込ませるわけであるから、時間差による不公平感も生じない。

試験の形式は次の方法を採用した。先ず学生にブースを使って発音をテープに吹き込ませる。回収後、教員が点検し、採点をして学生に返却する。返却時に一人一人の学生に発音が不正確だった箇所をもう一度発音させ、矯正する。発音の指導は特にこの個別指導が不可欠と考える。もちろん、日本語母語話者共通の誤りもあり、この場合は必ずしも個別指導の時間を割かなくても、全員に注意を促すことで、ある程度の効果を上げることが可能であるが、最終的にはやはり個別の矯正が必要となる。テープに吹き込ませることによって、一人一人の発音のチェックが可能であり、有効的であったと思う。

今期発音の指導において、反省しなければならない点があった。一つは福地(1990)で紹介されているように、試験当日に初めて学生に問題を提示するのではなく、予め提示し、学生に練習

時間を十分に取らせた上で、試験をすれば、発音の習得により効果的であったと思われる。もう一つは、モデルの発音を学生の発音と同時に吹き込ませなかったことである。このようにすれば、それを後で学生に聞かせることによって、モデルと自分の発音との違いを自己点検することができる。次回はこの反省点を踏まえて、LLを使っていきたいと思っている。

本文については、LLを主にリピートに利用した。しかし、ただテープを聞いてリピートするだけでは、普通教室でのテープレコーダの使用と効果は変わらない。LL教室では適量でテープを切って、数回リピートさせた後、テープを切らずに流したままにして、ポーズの時間を利用してリピートするように指導した。幸い統一教科書のテープはリピートに便利のように適当な長さでポーズを入れて録音されているため、使い勝手が良かった。また、教科書用の朗読調ではなく、ノーマルスピードで編集されていることから、自然なスピードで話す訓練にもなり、更にモデルの発音を間髪入れずにリピートすることから、声調の習得にも効果的であった。この場合にも来年度は学生が自己点検できるように、モデルと学生の音声を同時に録音させたいと思っている。

4. 今後の課題

今後の課題として、如何に普通教室と併用するかという問題がある。恐ら

くLL教室数から見て、普通教室との併用は避けられないと思われる。教科書の各課に対して普通教室とLL教室を1回ずつ使用し、つまり合計2回の授業で1課を学習する進度を取った場合には、それぞれの教室の特徴を生かした授業も可能であるが、この進度では1年間に学ばなければならない規定の学習量を消化できない。年間の学習量をこなすためには、1～2回の授業で1課を終えなければならない。この場合には各課毎のLLの使用時間にアンバランスが生じる。ある課は普通教室を使う時間が多く、ある課はLL教室を使う時間が多といった具合である。これをどのように克服するかが来年度の最重要課題である。

5. おわりに

もうかれこれ10年も前になるだろうか。池袋の東武デパートの店内放送に日本語、英語と並んで中国語が流されるようになった。私にとって非常に感動的な出来事であった。今まで一部の貿易部門や中華街でしか使われてこなかった中国語がデパートという不特定多数の人々が行く場所で使われ始めたということは、中国語が身近な言語となり、一般市民レベルまで降りてきたということになる。つまり、中国語を母語とする人達が日本人の身近に存在するということであり、実用的な中国語に対するニーズが更に高まったと言えよう。保坂(1998)の学生に対する

アンケート調査でも、実用性の高い会話能力を身に付けたいと希望する学生が多数を占めると指摘されている。多数の学生を同時に教えなければならない実状を考えると、LLは中国語を使った質問に学生が中国語で答えるという問答形式にも威力を発揮するため、会話練習にもLLを有効的に利用したいと思っている。ただ残念なことに、中国語では初級者のためのLL用の教材が少なく、LLの使用方法についての研究もあまり進んでいないため、しばらくは試行錯誤が続きそうである。

(やすい ふみこ

本学ランゲージセンター中国語嘱託講師)

参考文献

- 長谷川良一(1989)「LL教室を組み入れた中国語入門教育」『中国文学研究』早稲田大学中国文学会
- 福地桂子(1990)「中国語教育におけるLLの実践」『長崎総合大学紀要』
- 保坂律子(1998)「日本大学漢語学司情況調査」『世界大学漢語学第2期』
- 杉本孝子(1996)「リスニング指導に於けるLL利用の効果」『大学教育研究フォーラム』1立教大学
- 舛谷鋭(2000) LL AV 教室説明会
<<http://www.rikkyo.ne.jp/univ/masutani/lang/11200004.html>>
[2001. 2. 25]